

4.28 沖縄奪還闘争を全人民の力で大爆発させよう

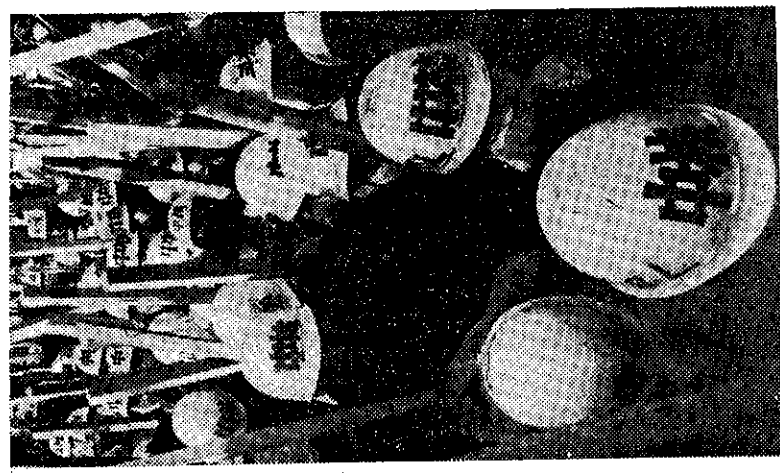
革命的共産主義者同盟
マルクス主義学生同盟・中核派

全国の労働者・学生・高校生・市民の闘争と、二・二八闘争、東大・日大を範囲とする全国大学闘争の燃発という全人民的闘いの高揚によって、一切の政策の激発が暴露されたにもかかわらず、佐藤内閣政府はいまだかつてその一歩も前進の政策を掲げてきている。安閑時の立場を明確に打ち出し、そのためにありとあらゆる手段をとるという事を書いた。大学闘争に対しては機動隊導入にましまさず、ついでには高橋達也に機動隊を導入し卒業生闘争に取上げた高校生を逮捕し退学処分するなどの事案は、何よりも闘争の佐藤政府の姿勢を表明している。このような態度は決して学生・高校生にとまらさず、たとえどんなにきつい反共でも、労働者、市民の闘いに同様にけられていく。このことには七〇年春前にして佐藤内閣が力の政策に全面的に燃発したことを明白に示しているのである。そしてその佐藤内閣の政策は、七〇年に対する佐藤内閣の唯一の姿勢、政策であるということである。

七〇年は日本青年連帯によって文字通りの最大の危機とならんとしている。それは戦後一貫して日本青年連帯の存在を多岐にわたる日本安福同盟が在りた危機からなされているからである。沖縄をアメリカ軍管地にしたがって、アメリカの植民地化にたがって、高橋達也が日本青年連帯は、いまま、沖縄問題に重大な火種となつて、日米安福同盟が根柢から揺らぐと決断して解決しない若輩者があつてしま

っている。日米安福同盟の攻撃は、生存の危機をもたらす日本共産主義は、ベトナム侵襲戦争における米帝の敗北の危機と軍事力の緊張の拡大という情勢の中で、沖縄の分離、永く孤立化の政策を徹底的に推進せんとしている。沖縄の血の叫びに耳をかすところか、二、四、五、六の弾圧に思ふに及ぶに本土政府のたゞいって沖縄人民の叫びを抑え、ますます沖縄人民にベトナム侵襲戦争の犠牲をおしつけているのである。そして沖縄の永く孤立化の政策を七〇年を頂点として掲げている。六月、愛知外相訪米、十一月、佐藤訪米とその総仕上げである。

七〇年は決して六〇年と同様にはいかない。六〇年当時の時は、それなりに安福同盟を闘争を論議し、決断した。しかし七〇年は、安福問題が全国的に暴露されること、高橋達也の首相の独断、内閣の段階、一切の事案を進行させておこなっている。十二月、佐藤訪米、二ヶ月、佐藤内閣の結論を問答無用、力によって日本国民におしつけるとして佐藤内閣の七〇年春の取り巻きのである。こうした取り巻きの危機に、我々は手をまわっているわけにはいかなかった。まして沖縄奪還、安福同盟の最大の危機は暴露である。



は、特定の闘争とならなければならぬ。七〇年における日本青年連帯の野望を根柢から打ち破り、十一月、訪米を十一月をまたして、押しやる最大の闘争とならなければならぬ。何故ならば十一月、佐藤訪米を日本人が許すならば七〇年は完全に佐藤内閣のベトナム侵襲戦争は進行し、六〇年安福同盟と同様に七〇年安福戦争は敗北に陥らなければならない。

区域、全学連、区域高協に組織する労働者、学生、高校生、市民の力で四月十八日、日産車日本共産主義者が、沖縄奪還、安福同盟の最大の危機を爆発させることはない。この闘争は機動隊を根柢に打ち、東大、神田、新大でなされた事態を全部でまき起し、佐藤内閣を暴くべきである。「もし安福同盟政策を維持するならば、現体制そのものが打倒される」という警告を佐藤内閣へ。四・二八沖縄奪還戦争は掲げらるべきこと

である。そしてこの本土における四・二八闘争の最大の爆発は、沖縄人民を心から激励し、沖縄人民のベトナムを助すや爆発させるものとなることは確実である。全国の労働者・学生・高校生市民の闘争を、十一月、二・二八新協闘争をいかに高く掲げた全部二十万の力と、四・二八沖縄奪還戦争を大爆発させ、十一月、佐藤訪米を完全な敗北に陥れ、七〇年安福戦争を根本から打ち破り、まき起すことまで佐藤内閣政府を追いこすではない

か。四・二〇労学総決起集会を成功させるの力と四・二八沖縄奪還戦争の最大の爆発をならせよう。全国の労働者・学生・高校生市民は四・二〇、四・二八闘争に総決起せよ。……………(写真は一・二七沖縄奪還闘争に決起した手裏。この本土の闘いの爆発に添った国家権力は、金田金等委員長、政山全孝連帯委員長を逮捕し、またし拘留中。)

4.20 労学総決起集会

日時 四月二〇日 十一時
場所 明治公園 (国営新幹線下町)